生き残りをかけた経営基盤の再編

ー進化を続ける「観音池ポーク」ー

農事組合法人 萩原養豚生産組合（養豚経営・宮崎県都城市）

地域の概要

農事組合法人萩原養豚生産組合（以下「萩原養豚」）のある都城市は、宮崎県南西端にあり、広大な都城盆地に位置している。地域は温暖な気候に恵まれており、食料供給基地として南九州の中核を担っている。豚、肉用牛、ブロイラーが盛んで、施設園芸ではキュウリやイチゴ等の作物の栽培も盛んであり、令和元年農業産出額は約877億円、うち畜産が83.9％を占める。なお、都城市の農業産出額は全国第１位で、豚・肉用牛は同第１位、ブロイラーは同第２位と全国屈指の畜産地帯である。

経営・活動の推移

【共同利用から共同経営への転換】

萩原養豚は昭和52年に共同利用施設等の設置を行う法人（１号法人）として設立、８戸で豚舎の共同利用を開始した。その後、現在の3戸（馬場・嶋田・山元農場）となった。平成27年には、３戸を統合し、農業経営を営む法人（２号法人）への組織再編を行った。

平成28年に県経済連の支援で繁殖農場を確保するとともに、「強い農業づくり交付金事業」を活用して、共同利用施設を肥育専用豚舎に改修し、２サイト方式が実現した。

このことで、320頭から650頭へ増頭すると同時に、３戸の強み(繁殖・肥育・経営管理)

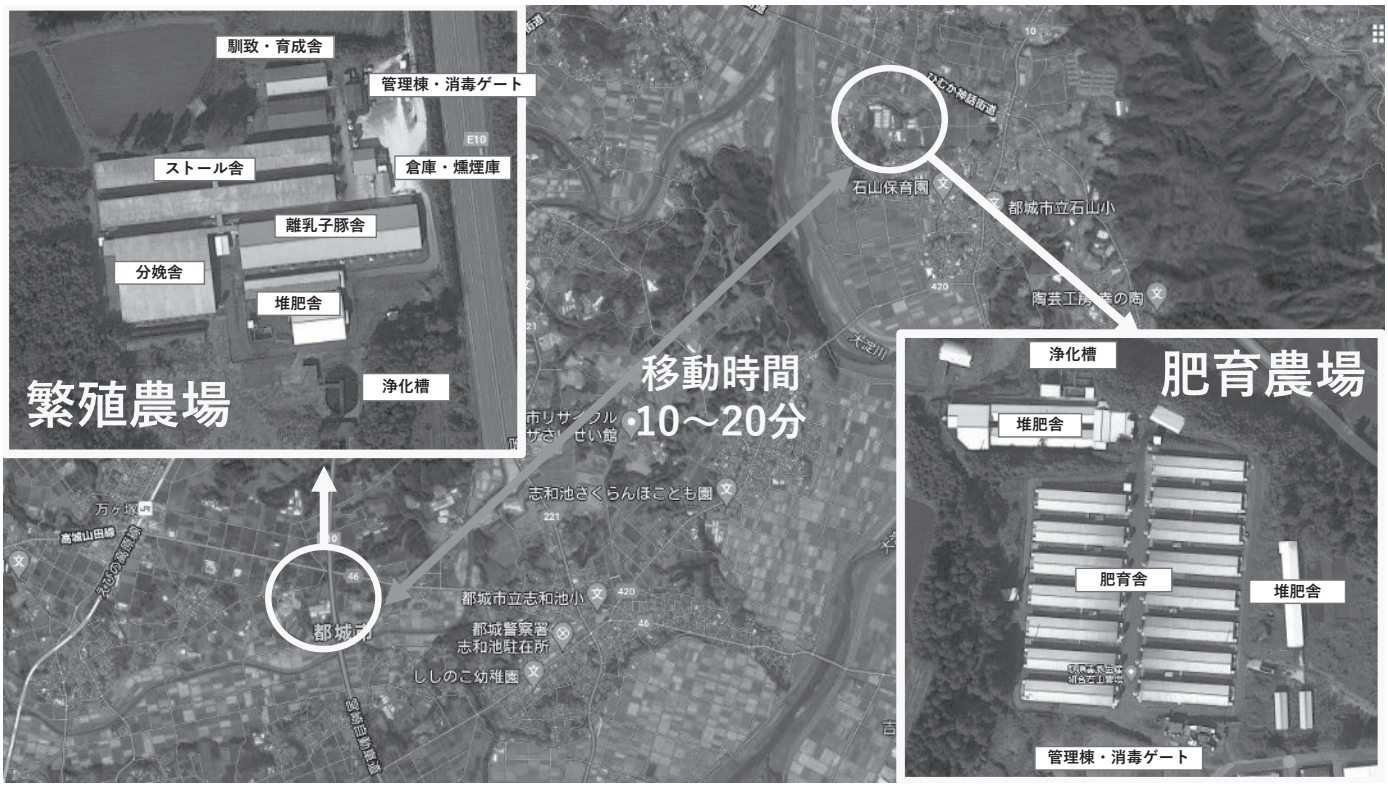
（写真１）繁殖農場 役員・従業員（左から２番目 理事長の嶋田幸基さん、３番目 理事の山元久司さん）

（写真２）肥育農場 役員・従業員（右から２番目 理事の馬場康輔さん）

（表１）経営・活動の推移

年　次	作目構成	飼養頭数	経営・活動の内容
昭和52～53年	養豚	馬場 母豚50頭 嶋田 母豚50頭 山元 母豚50頭	（農）萩原養豚生産組合を設立（１号法人）（S52） 共同利用豚舎(養豚団地、母豚360頭規模)を整備（S53） 農場経営は個別（馬場・嶋田・山元農場含めて８戸）
昭和53～平成元年	〃	徐々に規模拡大	馬場通 氏　就農（２代目）（S53） 嶋田幸基 氏　就農（２代目）（S56） 大ヨークシャー種を素豚として導入（銘柄づくり開始）（S63） 山元久司 氏　就農（２代目）（H１） 廃業等により養豚団地の戸数が４戸に減少、各農場が規模拡大
平成２～６年	〃	馬場 母豚100頭 嶋田 母豚100頭 山元 母豚120頭	観音池ポーク研究会を設立し、銘柄豚の勉強会を開始（H２） ネッカリッチ試験給与開始（H３） 地元精肉店にて「観音池ポーク」販売開始（H６）
平成10年	〃	〃	観音池ポーク研究会から組織変更、観音池ポーク出荷組合を設立
平成13～14年	〃	〃	販売部門「㈲とんとん百姓村」設立、直売店開設（H13） 地元の学校給食への納入開始（H14）
平成15～23年	〃	〃	馬場康輔 氏　就農（３代目）（H15） 地元学校への出前講座「とんとん教室」開催（H16） エコフィード（リサイクル飼料）の給与試験開始（H17） 嶋田祥吾 氏　就農（３代目）（H18） 廃業等により養豚団地の戸数が３戸に減少
平成24年	〃	〃	「㈲とんとん百姓村」を「㈲観音池ポーク」へ商号変更
平成27年	〃	〃	（農）萩原養豚生産組合の組織再編（１号法人から２号法人へ） ３戸の個別経営を統合し、共同経営を開始
平成28年	〃	母豚700頭	強い農業づくり交付金事業で豚舎、浄化槽を整備し、規模拡大 繁殖と肥育農場を分離する「２サイト」方式を導入
平成29年	〃	母豚650頭	地域未利用資源「笹サイレージ」給与開始 第60回宮崎県畜産共進会でグランドチャンピオンを受賞 生産性向上により、母豚数700頭から650頭に調整
平成30年	〃	〃	第10回宮崎県肉畜共進会でグランドチャンピオンを受賞（２連覇達成）
平成31年 令和元年	〃	〃	第48回日本農業賞（集団組織の部）優秀賞を受賞（観音池ポーク出荷組合）
令和２年	〃	〃	防疫体制の強化および更新豚の確保（豚熱等対策） GP（原種豚）を導入し、自家育成を開始

（図１）農場位置図・レイアウト



の共有、適材適所の役割分担により、強固な経営基盤が築かれている。

経営・技術の特色等

【高度な防疫強化対策と高い繁殖成績を維持する管理技術】

防疫強化のため２サイト方式､オールイン･オールアウト方式を導入したことで、農場間の疾病伝播リスクの抑制、豚群間の交差汚染の防止、豚房の十分な水洗・消毒・乾燥期間の確保ができるようになり、離乳後事故率は導入前の11.0％（H24～26平均）から6.3％（H30～Ｒ２平均）に減少した。

更に、ウィークリー管理を取り入れたことで、種付、分娩介助等、徹底した分娩管理ができるようになり、経営統合後（H30～Ｒ２平均）は、種雌豚１頭当たりの年間平均分娩回数、総産子数、生存産子数、離乳頭数、出荷頭数で高い生産性を実現している。

【卓越した出荷選定技術および肥育管理】

出荷豚は体型を吟味しながら１頭１頭の体測を徹底しており、経営統合後も枝肉重量74kg前後を維持しつつ、上物率75％以上を実現している。

肥育管理では、棟ごとにベンチマーキングを実施し、管理担当者にフィードバックすることで、成績向上に役立てている。県共進会

（表２）経営実績（令和２年度）

経営の概要	労働力員数（畜産・2000hr換算）	家族構成員	3.3人
		従業員	11.8人
	種雌豚平均飼養頭数		654.0頭
	肥育豚平均飼養頭数		6,162.0頭
	年間子豚出荷頭数		5,341頭
	年間肉豚出荷頭数		12,832頭
収益性	所得率		18.8％
	種雌豚１頭当たり生産費用		765,533円
生産性	繁殖	種雌豚１頭当たり年間平均分娩回数	2.53回
		１腹当たり分娩子豚頭数	15.1頭
		種雌豚１頭当たり年間分娩子豚頭数	38.2頭
		１腹当たり哺乳開始子豚頭数	13.7頭
		種雌豚１頭当たり年間哺乳開始子豚頭数	34.8頭
		１腹当たり離乳子豚頭数	11.8 頭
		種雌豚１頭当たり年間離乳子豚頭数	29.8 頭
	肥育	種雌豚１頭当たり年間出荷頭数（子豚）	8.2 頭
		種雌豚１頭当たり年間出荷頭数（肉豚）	19.6 頭
		種雌豚１頭当たり年間出荷頭数（子豚・肉豚）	27.8 頭
		肥育豚事故率（離乳時からの事故率）	5.2％
		肥育開始時 日齢	74.2日
		肥育開始時 体重	36.6kg
		肉豚出荷時 日齢	170.1日
		肉豚出荷時 体重	111.5kg
		平均肥育日数	95.9日
		出荷肉豚１頭１日当たり増体重	0.781kg
		トータル飼料要求率	2.98
		肥育豚飼料要求率	2.45
		枝肉重量	74.3kg
		販売価格 肉豚１頭当たり平均価格	42,011円
		販売価格 枝肉１kg当たり平均価格	565.1円
		枝肉規格「上」以上適合率	75.1％

「肉豚枝肉の部」で優等首席２連覇（平成29年・30年）を達成し、卓越した出荷選定技術は本県トップレベルにある。

【経営基盤の再編と経営戦略による所得向上】

経営基盤再編後は生産性が格段に向上し、種雌豚１頭当たり経常所得は、経営統合前の

（写真３）分娩舎（徹底した分娩管理）

（写真４）肥育舎（体型を吟味しながら１頭１頭を体測）

（写真５）県共進会で２連覇を達成

108千円（H24～26平均）から、158千円（H30～R２平均）に増加している。

これには銘柄豚「観音池ポーク」の売り上げが増加してきたことも寄与している。徹底した経営・生産管理を下地とし、経営基盤の再編という大きな経営判断と、地域と歩むものづくりを大切に取り組んできた成果と認識している。

【経営管理体制の構築（畜産関係団体との連携）】

経営統合前から、経営・生産データを持ち寄ってベンチマーキングを実施してきた他、経営検討会をJA、普及センター等と連携の下で毎月開催し、高い経営感覚が培われてきた。

現在でも定期的な検討会、外部講師を招いた勉強会を開催する他、管理獣医師・JA・経済連との現地検討会、畜産協会の経営分析・診断等を継続して実施し、生産と経営の双方について、徹底した経営管理体制が継続されている。

地域に対する貢献

【地域未利用資源「笹サイレージ」等の活用】

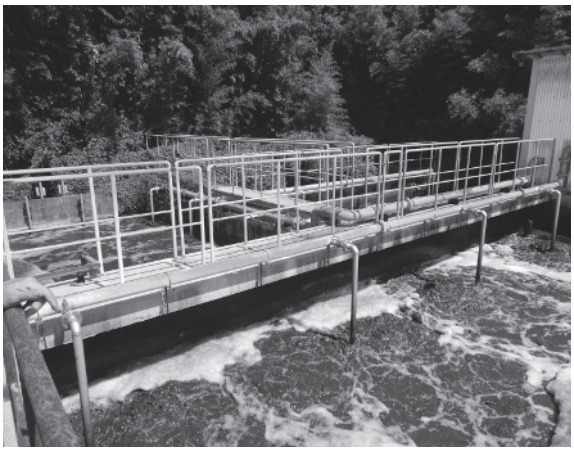
「笹サイレージ」は、県畜産試験場の試験研究で飼料としての利用価値や、悪臭低減効果が見出され、地元民間企業による製品化が開始されていた。

そこで、平成29年から養豚分野初の試みとなる「笹サイレージ」の給与を始め、肉質向上や豚舎の臭気低減効果が実証された。このことは、銘柄豚の販売力強化に寄与するだけでなく、地域における放置竹林の課題解決及び環境保全への貢献に寄与している。

他にも、平成17年から食品工場の残さ（パ

（写真６）外部講師と連携した現場検討会

（写真７）堆肥舎（JA委託の袋詰め堆肥の販売、地域の耕種農家に堆肥供給）



（写真８）浄化槽（定期的な水質検査でも排水基準をクリア）

ンの耳や麺類等）を飼料化した「エコフィード」を利用し、フードロスの問題解決にも取り組んでいる。

【環境保全】

堆肥は積上式堆肥舎、ロータリー・スクリュー撹拌式堆肥舎で適切に処理し、JA委託の袋詰め堆肥の販売や地域の耕種農家への供給等、耕畜連携を進めている。浄化処理施設は、定期的に実施する水質分析でも排水基準を満たし、放流に際しても近隣からの苦情等は発生していない。

【地域に根差した６次産業化の取組み「観音池ポーク」】

地域の人に愛されるものづくりを信条とし、常に消費者の声に耳を傾けながら生産部門「観音池ポーク出荷組合」（萩原養豚、同地域の生産者1戸で構成）、販売部門「有限会社観音池ポーク」(出荷組合の生産者が出資)と連携し、肉質の改良を実施してきた。

美味しい豚肉づくりのこだわりは、大学、畜産試験場等と連携しながら、常に進化しているオーダーメイドの餌にあり、疾病を予防する「ネッカリッチ」、肉の柔らかさを引き出す「エコフィード」、脂質を良くする「笹サイレージ」の給与であった。

併せて、地元の名所「観音池」をブランド名に冠し、直売所・オンラインショップの開設、SNSでの情報発信等、全国的な地域ブランドのPRや、地域活動として地産地消や食育の推進及び職場体験の受入等、消費者との垣根を越えた交流を積極的に行い、地域産業の発展に貢献している。

更に、高齢者等でも安心して美味しく食べられるスマイルケア食「なめらかつるるんメンチカツ」の量産化に向けて準備を進める他、定期的に地域のこども宅食へ豚肉・加工品を提供し、食べる楽しさを伝え、地域における心身の健康維持・増進に寄与している。

女性の活躍・働きやすい職場環境づくり

【女性の活躍】

萩原養豚の経理は理事長の妻が担当する他、観音池グループの販売部門「有限会社観音池ポーク」では、多数の女性従業員が従事しており、女性目線のアイデアが商品開発に積極的に取り入れられる等、女性が活躍している。現在では従業員30名（うち女性22名）に増加し、地域の雇用創出にも大きく貢献している。

【就業規則および福利厚生の取り組み】

萩原養豚は、積極的に地域雇用の創出に取り組み、都城市内の20代から70代の幅広い年

（写真９）観音池ポーク 直売所（女性の活躍）

齢層が従事している。就業規則や福利厚生等を整備し、１日の労働は7.5時間、休日は４週で6.5日確保している。また、昇給（１回/年）、賞与（３回/年）、社会保険、退職金制度を設けている。社内の各種サークル活動には年間５万円助成し、従業員と家族との親睦を深める他、心身のリフレッシュやモチベーション向上に役立てられている。

将来の方向性

【次世代への継承（経営の継続性）】

経営統合した３戸にはすでに後継者が決まっており、彼らは繁殖や肥育の部門管理を任せられている。また、生産管理、経営管理が学べる畜産協会の経営検討会にも積極的に参加している。

【今後の経営計画】

飼養管理、バイオセキュリティーの更なる強化と、より一層の生産性・収益性の向上を図ると共に、「観音池ポーク」ブランドを更に進化させ、「より安心・安全で本当に美味しい豚肉づくり」を追及していく。

その第一歩として、農場HACCP認証に向けた取組を検討しており、安全な家畜を生産するための衛生管理の構築と継続的な改善、食の安全および生産性・衛生レベルの向上を目指していく。